
万物の神

エルーモア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万物の神

【Nコード】

N07750

【作者名】

エルーモア

【あらすじ】

とある場所に全てを作ったと言われるモノが存在していた。そのモノは魔法のある世界を作り、自分もそこへ行ってみる事を決めた。さあ、いま大神の冒険が始まる！

一、大神（前書き）

作ってみました。

この小説の欠点は文字数が少ない事です。

もう少し私に文才があれば……！

一、大神

とある場所に、全てを創造したと言われるモノが存在していた。

そのモノは宇宙を作り、星を作り、大地を作り、海を作り、そして『世界』を作った。

そのモノは世界を何個も作った。

そうしているうちに生まれた人間からは『創造神』と、作った神たちからは『大神^{おおがみ}』と呼ばれるようになった。

そしてある時そのモノは、人間が作った漫画の中にある『魔法』に興味を持った。

もし、魔法というものが存在する世界を作ったら……その時からそのモノは、魔法が存在する世界の製作に取り組んだ。

ただ、そう簡単に魔法が使えては面白くない。そう考えたモノは魔法を使う元となる神を作った。

そして、神だけでは足りないことに気付いたモノは精霊を作った。

あとは今までの作り方で、世界を作っていた。

その時に、獣や爬虫類などからもヒトガタになれるように手を加えた。

途中、失敗してしまったものは『魔物』と呼ぶことにした。

全てが順調に進み、そのモノはついに『魔法がある世界』を作り終えた。

ヒトガタの生物も見え始め、そのモノはとても満足していた。

そしてそれから1000年程度経つと、得意不得意はあるが、魔法を使うのが普通の事になった世界が完成した。

その世界の名を『カラーム』と呼ぶ。

「そつだ、カラームに行こう」

ある日、そのモノは見ているだけでは満足できなくなってしまった。

「本体はここに置いて……持つていくのは1%……いや、1%未満でいいか。久しぶりに神に会いに行こうかな」

そうして、そのモノは自身の名を『大神』と呼ぶ事にし、自身が作った世界へと旅立つのであった……。

一、大神（後書き）

自分も皆様に楽しんで頂けるように誠心誠意頑張りますので、不満な点などございましたら、感想欄へとお書き込みください。

二、自身が作った世界（前書き）

では、楽しんでいってくださいな。

おっと、ついでに大神の一人称は『私』。

そして、大神目線でいきますね。

あ、男の姿をしていますよ。

二、自身が作った世界

自身が作った大地に降り立つ。さわやかな風が私を吹き抜け、地面に生えている草をなびかせた。

遠くにある山は一步も動かないというようにドッシリと構えている。ふむ、我ながら……完璧！

しかし、近くに人はいないようだ。

残念ながらそのままそこにいても、何かが来るようすは無かったの
でそこから立ち去った。

この世界は言ってしまうと全て私の子供だ。そのせいかは分からないが、地面に生えている草も私に寄り添うように歩いてきている……
…ような気がする。

ああ、それにしてもこの世界を作ってよかった。
そんなことをのほほんとしながら考えていると、

「きゅん」

「！！」

その場の雰囲気合わない悲鳴が聞こえてきた。何があったのかは
分からないが、全て私の子供だ。

誰も死なせません！

私が悲鳴のある方へいくと、なにやら豪華な馬車が横転しているところだった。

その馬車の周りには魔物があり、馬車の中にいる人を食べようとしている。

しかし、護衛のような人たちが中の人を必死に守って、護衛のうちの一人が、犬のような形をした魔物に噛みつかれてしまった。

護衛たちの注意がそちらへ向いた瞬間に、またもう一匹の魔物が護衛の頭を

「ッ！ 危ない！」

食いちぎられようとしたところを、私が即座に作った火の球で防いだ。

勿論、魔物は気絶だけで済ませておく。

新たな敵が来た事を警戒したのか、魔物たちはその傷ついた仲間の首を加えて走り去っていった。

「っと。大丈夫か？」

そこで私は護衛のうちの一人が噛みつかれていた事を思い出し、急いで倒れている馬車の方へ向かった。

〜@〜

どうやら噛みつかれたと言っても防具の上からだったから、致命傷

にはならなかった。

それよりも、あの倒れていた馬車は……

「あれほど私の身を大事にしてと言ったのに！ 頭をぶつけてしまったではありませんか！」

「す、すみません、王女様……」

中にはある国の王女が入っていたようだ。横転した時に頭をぶつけたらしいが……それだけで済んだのは、良かった。

「？ あそこにいる男性はどなたですか？」

む、私のことらしい。

「ああ、彼はあの魔物たちを追い払ってくれたんですよ」

「へえ……ちょっと、そのあなた！ こっちにきなさい！」

呼ばれてしまった。さっきから王女は上から目線だが、助かったことによる安堵からなるものだと思う。そうでなければ、護衛が魔物に噛みつかれたときに、飛び出して行こうとしない。

護衛たちもそれが分かっているのか、不満をいうどころか苦笑いをしている。

「ふむ、なんででしょうか？」

「お礼を言います。このメノ・ルシアン・ベリンを助けてくださり、

ありがとうございます。……実を言うと、あなたに頼みたい事があるのです」

「……目的地までの護衛、ですか？」

「はい。またあのような魔物が襲ってくるかもしれません。私の護衛では力不足。そこで、あなたの力を貸していただきたいのです」

「しかし、私はどこの誰かも分からない人物ですが……」

「もし、あなたが何かをすれば、それは私の人を見る目がなかっただけです。殺されても文句は言えませんよ」

ようやく余裕が出てきたのかそういつてコロコロ笑う王女。

……すごい理由だが。

「まあ、構いませんよ」

断る理由もない。生存率も、私がいた方が上がる。

「ありがとうございます。では、行きましようか」

いつの間にか元に戻っていた馬車に乗る王女。

横を見ると、護衛たちが汗を大量にかいている。

……よく頑張った。

二、自身が作った世界（後書き）

最初は自己中心の王女にするつもりだったのですが、初っ端がそれっていうのは……と思い、変えました。

三、ベルン王国

私は、私がつつた全てのモノを愛している。

それゆえ何も死なせたりはしたくなかった。しかし、不死にしてしまつては進化をする事ができない。

自分がどのようにして生まれたか、それを考えることにより人は進化していくのだ。

最初から人型にして生まれた訳じゃない。何億年という時間をかけて人の形になつた。

それを考えるから、自分の命は素晴らしいものだ、と初めて分かる。

しかし、素晴らしいと思つていても一人では何も出来ない。だから、協力しお互いに助け合い、学んでいる。

ろくに協力もせず、自分を過信してはいけないのだ。過信すると先祖の偉大さが分からず、自分勝手になりやすい。

なぜ私がこんな話をしているか、と言うと……

「だから、僕がいた方がモンスターに襲われずに済んだのに！ほら、頭を打つたんだろ？ 護衛がしっかりしていないからだ！」

「い、いえ……魔物に襲われてもそれだけで済んだのだから良いではないですか」

「あのおとき僕がいたらそれすらも起こらなかつたんだ！」

ここに約一名、その代表とされるような人物がいるのだよ。

なぜこうなったか。それは……

～回想シーン～

「ふう……あつ！ 見えてきましたよ、大神様！ あれが私の住んでいる国、ベルン王国です！」

馬車から身を乗り出してはしゃぎながら言うメノ王女。

メノは見た目17、8歳なのに精神年齢はそれよりも低いような気がする。

「あまり身を乗り出さないでください、王女様」

ほら、護衛に注意された。

「すみません……」

「まったく、しっかりしてくださいよ」

メノはすっかりと落ち込んでしまっていて護衛の顔を見ていないが、仮面の中であいつの顔が緩みまくっている。

このサディストめ！

というか、護衛がそんなのでいいのだろうか？

ギィイ、という音が聞こえる。どうやら中に入るようだ。

「メノ王女。私はこのままなのですか？」

今、私は馬車のなかにいるのだ。つまり、王女と二人だけで。

そもそも護衛の後ろに乗ろうと思っていたのだが、なぜか王女が駄々をこねて半強制的になかに入ることとなった。

護衛たちもなぜか止めなかった。

「ええ、お礼がしたいのです。あと、お父様とお母様に紹介したいのですが…… よろしいですか？」

「紹介？」

「私が連れてきたものです、と」

なんだか意味がよく分からない。

「まあいいですが。それよりも……」

「なんですか？」

「あの青年は誰なんです？ 貴女のことをずっと見ていますが」

そう、城内に入ろうとしたときに急に馬車の前へ青年が現れたのだ。

その青年はメノ王女に熱い視線を送りつつ、私には敵意ばつちりという奇妙なことをしていた。

「あつ………すいません。ちょっとここで降りましょう」

「？ はい」

メノ王女が青年へと近づいていくと、青年は彼女の肩を掴み、

「メノ！ 怪我をしたと聞いたぞ！ だからあんなに

ダムが崩壊したように一気に喋り出した。

～回想シーン・終わり～

「………！！………メノ。あいつは一体なんだ？ 無礼にも馬車の中で一緒に座っていたが」

青年は私の話題に持っていった。

「彼は、あのとき私たちが襲われているところを何も言わず、助けてくれました」

「ふん！ そんなのどうせ褒美目当てに決まってる！」

「………いいえ。私は彼に一度訊いてみたのです。『褒美はいるか』と。彼は『別にいい』と答えました」

む？ そんな質問された記憶がないのだが。

「それは」

「私の『力』。それを使って訊きました。間違いありません」

『力』か。確か魔法が使えなくても生き残れるように付けた……よ
うな気がする。

「くっ！……おい、貴様！」

「何でしょうか？」

「決闘を申し込む！ 三日後、ベルン城の広場だ！」

青年はそう言いつと、すぐにどこかへ行ってしまった。

「……決闘？」

「ああ、大神様、すみません！ 彼は一度言つと何も聞かなくて……」

「彼は一体何ですか？」

「彼は……」

と、ここで一言区切る王女。そんなに言いたくない事か。

「……私の婚約者です。親同士が勝手に決めた……」

「つまり、政略結婚というわけですか」

「……はい」

それは嫌だろう。自分は愛してもいないのに勝手に決められるというのは。

「私が猛反対をするとなんとか二人とも訊いてくれましたが、今日までに反対する理由を見つけなければならなかったのです」

「私に言った紹介というのは、私が反対する理由として出したかったわけですね」

「その通りです。最初は利用するつもりでした……本当にすいません」

「まあいいですよ、私としても政略結婚は認めたくない」

「あ……ありがとうございます！ では行きましょう！」

そういうと笑顔を見せるメノ王女。力の事に関しては、また追々訊けばいいだろう。

……ん？

『最初は利用するつもりでした』

『最初は利用する』

『最初は』

『最初』

……最初？
今は……？

三、ベルン王国（後書き）

自己中心の人物は青年になりましたねえ。

まあ彼には捨て駒となってゲフンゲフン。

感想、批判、こうした方がいいかも……など、よろしくお願いします。

四、神と王（前書き）

今のところ更新は順調ですが、きっとこれから厳しくなると
思います……。

四、神と王

メノ王女の後ろを歩きながら、さっき言われたことを考える。

『最初は利用するつもりでした』

彼女は、最初、と言ったのだ。今は……なんだ？

ふむ、訊いてみようか。

「メノ王女、さっき貴女が言っている「あ！ 着きましたよ！」…まあ、いいか」

これもまたいつか訊けばいいだろう。それまでに私がこの世界に留まっていれば、だが。

ざっと城内を見て分かったが、城全体が魔法で守られている。ちよつとやそつとの攻撃では傷すらつかない。

王女のそばにいた護衛が他とは違う、少々豪華なドアを開けた。ドアの中には壁に魔法陣が何個も描かれており、王と王妃の椅子の前には壁に書いてある魔法とは比べ物にならないくらい強い魔法の魔法陣が書かれてあった。

それぐらいしなないとなあ。でもきつと城の関係者にしか見えないように何かがしてあるんだろう。

なら見えないふりでもしておこう。

「お母様！ お父様！」

「メノ！ 無事だったのですね！」

「心配したぞ！ 途中モンスターに襲われたと聞いたからな……。でも良かった！」

優しくそうな顔をした女性と、厳しそうな顔だが少しどこか優しさが入っている顔をした男性と、メノが抱き合っている。

親子の中が悪い訳じゃなさそうだ。

「ああ、あんなこと言わなければよかった……。して、そちらの方は？」

「……お母様。彼が、私が結婚に反対した理由です」

「と、いうことは……」

「私は彼の事が……。す、好きなのです」

顔を真っ赤にさせて言うメノ王女。

しかし、いくら反対したいと思っけていても、あんなに上手い演技が出来るものか？

「『力』を使ってみましたか？」

「はい。彼は穢れなどないとても美しい魂の持ち主でした」

『力』……『魂』……そうか！

思い出した。いくつか与えた力のなかに、モノの魂を見ることができ
る能力があったのだ。

そして、子供へ、子供へ、とする度にどんどん力が増していったと
いうことか。

心が綺麗な人物にしか宿らないようにしたはずだ。

と、そこでメノと王と王妃の話が終わったのかこちらへと興味が移
った。

「我が娘を守ってくれてありがとう、感謝する」

「私もお礼を言いますわ、ありがとうございます」

「お主の名はなんと申す？」

「私は……」

と、そこで言葉が途切れる。

『大神』を名乗ってしまったもいいものか？ と。

神にもあつた事があるはずだ。そのときに私の『大神』という言葉
を聞かされているかもしれない。

しかし、まさか本当に私が神を作ったモノとは思わないだろう。

「どづしたのだ？」

「……私の名前は『大神』と言います」

「へえ、大神さんっていうのね」

「ほお、珍しい名前だな」

……杞憂だったようだ。

「それはそうと……」

気のせいか、二人の目がキラんと光ったような気が……！

「メノが好きだという話、良く聞かせてもらいましょうか!?!?」「

こいつら……親バカだ……。

四、神と王（後書き）

ええ、分かっています。

今回の出来はイマイチだったのでしょうか？

本当はもっと時間をかけてやりたかったのですが、生憎そういった時間がなくてですね……。

すみません、きつとまた編集します。

五、ナルシスト貴族（前書き）

待たせたのにも関わらず、驚きの短さ！

すいません。

五、ナルシスト貴族

「……と、いう事があってここまで来たのです。分かっていただけ
ましたか？」

とりあえず、メノ王女のご両親にここに来るまでのことを話した。
魔物に襲われそうになったところを助けたことから、好きだとい
うのは演技だという事も。
それを聞いた両親はホッとしているようだ。

「それでは失礼します」

「ちょっと待て」

私が王室を出ようとしたときに父親の方から呼び止められてしまっ
た。

「なんででしょうか？」

「なに、せっかくだからこの城を見学してはどうか、と思っ
てね。
メノ！ 案内してあげなさい」

「いいのですか？」

「ああ、いっていい」

「ありがとうございます！」

まあ、この城で使っている魔法にも興味がある。

もしかすると魔法の知識を蓄えさせようとしてくれているのかもしれない。

……正直言うと、私には関係のないことだが。

「それでは行きましようか。まず」

～@～

大方、城内の説明は終わり、今は中庭らしき場所で休息を取っている。

「それにしても、会う人全員が幸せそうだったのは、少しばかり驚いた」

「ええ。私の城はそれが自慢ですから」

ついでに、敬語はやめてほしいと言われたのでやめることにした。私としてはどちらでもよかったのだが。

「そういえば……王室での演技、あれは何だったんだ？ なんとなく思っていないにしては、少々上手すぎる」

「あ……実は、ですね。あなたに……その……憧れているんです」

「憧れ？」

「はい。私の力については案内しているときに話しましたが……貴

方の魂の清さに、心打たれました。私は今まで色々な魂を見てきました。この城にいる人たちはみんな魂がキレイですが、そうでない人がいます」

「……魂は、罪を犯すと汚れていく。その逆に善行をすれば清くなっていく。また、心から変われば魂も変わる。心と魂は繋がっている」

「その通りです。でも、生きていけば多少汚れが見えてきます。それは、必ずと言っていいほど。なのに貴方はちつとも汚れてなんかいませんでした。どうすればそこまでキレイになるのですか？」

私の魂が汚れていないのは、ついこの間造られたからです、なんて言えるはずもない。

だが、もし私が汚れてい^{ほんたい}れば、創るものも汚れるだろう。泥だらけの手で料理をすれば、食品に泥が付くように。

「私が言えることは一つだけだ、メノ。世界全てを自分の手で守る覚悟がないとならない、ということ」

「世界、全て、ですか」

「そつだ……ッ!？」

私がそう教えた瞬間、メノの魂が一気に美しく変化した。

「分かりました。世界全てを救えるかどうかは分かりませんが、私は自分なりのやり方で頑張っていきたいと思います」

「……………」

「大神様？」

「……………大丈夫だ。さて、そろそろ帰るとするか」

そうして、私は「ちょっと待て！ 貴様！」……………。

「なんだ？」

私の言葉を遮ったのはいつぞやのナルシスト貴族だった。

「貴様！ 僕との約束、覚えているのか！？」

「忘れてはいないが……………それがどうかしたか？」

「いやなに、貴様が僕に怯えて逃げ出さないように、寝泊まりはこの城でもらうからな！ もちろん許可は取っている！」

なんだこのナルシスト貴族は……………。妙なところで律儀なのだな。

「はあ……………承知した。という訳で三日間世話になるぞ、メノ」

「は、はい。分かりました」

「おい貴様！ なにメノを呼び捨てに」

ピーチクパーチクうるさいナルシスト貴族を放っておき、私はその場をメノと去る事にした。

まだ、ナルシスト貴族は気付いていないようだ。

本当に疲れる……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0775o/>

万物の神

2010年10月12日05時22分発行